



2022年12月 診療カレンダー

住所：東京都中央区日本橋大伝馬町13-8

2023年1月 診療カレンダー

メディカルプライム日本橋小伝馬町3階
TEL:03-3639-3110 FAX:03-3639-3112

日	月	火	水	木	金	土
27	28	29	30	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	1	2	3	4

今年もお世話になりました
来年もよろしく
お願いします

18時最終受付

ホームページ
院長ブログ公開中

「今月の言葉」
リスクを負わない者は勝利を手にはできない
～イビチャ・オシム(サッカー元日本代表監督)～

一般診療	月	火	水	木	金	土	日
10:00-13:00	●	●	●	●	●	●	×
15:30-19:00	×	●	●	●	●	×	×

サッカーW杯・カタール大会

連日、熱戦の続くサッカーのワールドカップ・カタール大会。皆さんは楽しんでいらっしゃいますか？このコラムは当初11月中に書こうとしていて、その時点では初戦のドイツ戦で「歓喜の勝利」を収めたのち、コスタリカにまさかの敗戦を喫してがっかりしていたのですが、バタバタ忙しくしているうちに今日はスペイン戦の翌日です。まさかのリーグ1位通過の快挙に大興奮しているところです。

今回のW杯では地上波の放送だけでなく、インターネットテレビであるABEMA TVでも全試合が放映されるためスマホやPCでご覧になられている方も多いのではないのでしょうか？ABEMA TVでは本田圭佑の解説が率直で面白いと評判ですし、カメラの角度も複数用意されていて自分の好きな角度からも視聴できるのは画期的だと思います。さらにYouTubeでは現地で見守っている人たちがスマホなどで撮影した動画を、すぐにアップロードし会場の雰囲気や臨場感を次々に伝えてくれています。海外の視聴者の試合中のリアクションなどもタイムリーに見ることができたり、W杯の楽しみ方の幅も広がりましたね。

カタールでのW杯ということで私と同世代の方は、カタールの「ドーハの悲劇」を覚えておいでだと思います。1993年ドーハで行われたW杯のアジア最終予選対イラク戦で後半アディショナルタイムまで2-1とリードしていた日本でしたが、コーナーキックからのヘディングゴールで2-2と引き分けに終わり、W杯初出場は夢と消えてしまいました。当時大学生だった私は、先輩の影響で「にわかファン」となり、この試合は生放送で見えていましたが、ショートコーナーからのヘディングシュートがゴールへ吸い込まれる様子は、不思議とスローモーションのようで、まさに悪夢でした。私は当時中山雅史選手のファンで、彼がアジア最終予選のイラン戦では今回のスペイン戦の三笥選手のように、ゴールラインを割るギリギリのところまでボールを拾って、そこからシュートをしてゴールを決めたこともあり、彼の諦めない姿に感動しました。

最終戦のイラク戦では中山選手は途中交代となり、個人的には嫌な予感がしたのですが、まさかの予感的中、終了間際に2-1と勝っているのにも関わらず、ラモス瑠偉が中途半端な攻撃からパスを相手にカットされたのち、カウンターを受けてシュートを打たれて最後のコーナーキックに繋がって同点に追いつかれてしまったのです。今の日本代表チームであればあり得ないミスでした。その時にピッチに立っていたのが現在の日本代表の森保一監督で、今回のスペインとの対戦ではアディショナルタイムで1点でも取られて同点となれば予選敗退確定という状況で、彼の脳裏にも「ドーハの悲劇」のことがよぎったそうです。

●9:00-12:30
前回のW杯では決勝ラウンドの1回戦で、強豪ベルギーに原口と乾の素晴らしいゴールで2点差としながらも情けない失点で同点に追いつかれ、その後のアディショナルタイムに不用意なコーナーキックからのカウンターで逆転されるという悪夢を味わった日本です。そういった苦い経験もひとつひとつを糧にここまでやってきたのだと思います。目標のベスト8、さらにそれ以上の高みを目指してぜひ頑張ってください。

さて、今回のW杯ですが、日本以外のアジア勢も頑張っていて、決勝ラウンドには日本以外にも豪州、韓国が残りました。私はその一因として、VARの存在があるのではないかと考えています。VARとはVideo Assistant Referee(ビデオ・アシスタント・レフェリー)のことで、カメラなどを用いて試合の審判とは別のスタッフが判断するというものです。サッカーでは前回のロシア大会で初めて採用されましたが、サッカー以外でもテニスの4大大会ではホークアイ(Hawk-Eye)というボールの位置や軌道を分析して審判の補助をするシステムが導入されていますし、野球でも2010年からビデオ判定が導入されています。なんとこのようなビデオ判定の先駆けが日本の大相撲だそうです。1969年から別室で審判員がモニターをチェックし、微妙な判定の時には土俵下の勝負審判と協議を行なっているそうです。

サッカーではこれまで審判による判断で物議をかもしたエピソードが多くあります。有名なのはマラドーナが手を使ってボールをコントロールしてゴールした「神の手」事件、またイングランドとドイツの2度のゴールポスト直撃後のゴール判定のトラブルなどはでしょうか。これらはもしVARがあれば正確にジャッジできたと思われる。いくら鍛えられた審判といえど角度によっては、判断ができないこともあるでしょう。またサッカー強国ではシミュレーションのような「ずるいプレー」もありがちです。VARはこれらのインチキなプレーをあぶりだして公平に判断することができ、このようなインチキをあまりしないアジアの国々には有利に働いているのではないかと考えます。

今回のW杯のサッカーボールにはチップが内蔵されていて、センサーによってボールの位置を正確に追跡できるそうです。また、選手の位置を12台のカメラで常にモニターし、ボールとの位置関係を常にトラッキングしているため正確にオフサイドの判定などもできるようです。このようなスポーツ競技におけるハイテク化は、コストが膨れていくという面は確かにありますが、最先端のテクノロジーの進化にも大きく寄与していると思われます。

さて、今年も残りわずかとなりました。当院へ受診されたすべての方々、一緒に働いてくださったスタッフの皆さん、ひとりひとりに感謝の気持ちでいっぱいです。本格的な冬が始まりますが、どうぞお元気で新年をお迎えください。

